

## 雄介との旅行

兒玉 稔

平成二十七年一月二十六日

子は父よりも母に懐くこれ世の常なるらし。その身中より出づるに加へ、母と過す時間、父に比し格段に長きことその因なるべし。我、子と距離あるを寂しと云ふにはあらねども、妻抜きにて子と旅行せむと思ひ附きしは仕事仲間の助言によりてなり。

我が子三人各學校行事課外活動など都合あれば、二三年置きに一人を指名して米國に連れ行き五六日を過しぬ。末の子雄介と羅府（ロサンゼルス）方面遊園地廻りせるは彼、小學五年の時なり。

我、職務多忙の頃にて、歸宅して出直す時間を惜み、會社より驛に直行、彼と落合て空港行きのバスに乗り。これまで二人きりになること少ければ、車内、お互ひに些かの遠慮ありて不自然なり。彼、良き子たらむとする努力隨所に見するは、出發に際し母より何等かの訓示得たと察せしむ。

日頃、家族揃ひての外食時、彼は横暴なる兄と姉に自分のポテトチップス掠め取らるるを嫌がり遂には怒りて大聲を上ぐ。この旅にては邪魔もの居らざれば被害の心配無し。心安らかに食事満喫す。

親たるもの、子と寐る時は意圖せざれども夜中に目覺め、子の様子に注意するが自然なれど、我家にては妻と子がいつも寢室を同じうし居れば、我はこれまで身もちてその經驗の事無し。今次は妻居らざれば、流石に毎夜、自ら一度ならず起き、彼の蒲團を懸け直すなどせり。

或夜ホテルの一室、例の如く目を覺し、薄明りの中、隣なる寢臺の雄介を横に見る。居らず。小用に立ちたるかと待てどその氣配無し。よもやと寢臺の下を覗けども姿無し。我、眠氣飛び、がはと立ち上がり必死に思ひを巡らす。氣附かぬうちに忍び入りし賊の連去りしか、自ら夢遊病者の如く起き出でて館内を彷徨するか。ならば未だ遠くには行くまじ。急ぎ室のドアに驅寄り半ば開けて外を見れども巨大ホテルの長く仄暗き廊下、延々と静まりて動くものの氣配更に無し。

すは、一大事。困惑と心配に我身震ふ。瞬間、明後日が歸國豫定日なるを思ふ。我が子居らずして如何にして歸られむ。尊はれし雄介、取戻さずば妻に會はず顔とてなし。手持ちドル乏しと雖も、手元の國際クレジットカード數枚、當面の救出活動を賄ふべし。歸國便キャンセルし、雄介見つけ出すまでこの國に留り、必ずや二人して共に歸らむとの決意固めたり。

兔にも角にも、我一人の手に餘る事態、階下なるフロントに傳へ、ホテル擧げての搜索を依頼せむ。この緊急時、夜着にて構はずと思へども、せめてズボンなり穿きて赴かむと天井照明點燈し、クロゼットに向ひしその時、寢臺と壁との隙間に留まる物體に氣付きぬ。膝を折り脊を丸め、狭き間隙に浮きて眠る雄介にてありき。寢返る拍子に寢臺

の向うに飛び出でたれども、壁近きにありて牀に落ちず途中に止まり、二重のベッド  
マットの厚みに隠れ居るを、我、消え失せぬと早とちりせり。

父の狼狽と緊張、斷固搜索せむとの覺悟を何れも知らず、彼、狭き空間に止りて胎兒  
の如き形に眠る。これを見ては、深夜一人聳立てて笑はざるを得ず。空の寢臺に上りて  
跪き、雄介雄介と呼べど起きもせざれば、腕と足同時に持ちて引揚げぬ。存外に重しと  
思ふ。無事を見し安堵の故か、涙、頬に傳ふを感ず。

翌朝、このこと聞かせども、彼、良く寐たる他には何事も覺えずと。我のみが知る羅  
府の出來事にてぞありける。